



②鬼ノ城登り口「新山寺跡」にある直径1.8mの「鬼の釜」

## 桃太郎伝説ゆかりの神社・遺跡

茅葺宮に住居を構え、二八一歳の長寿をまつと  
うしたとされる。  
現在、命は吉備の中山茶白山古墳に祀られて  
いる。



### ③矢喰天神社

吉備武彦命（吉備津彦命の異母弟である若日子建吉備津彦命の子）を祀る神社。

吉備津彦命の放った矢と温羅が放った矢が空中で噛み合っただけで、本殿にはその時の矢が祀ってある。

後に、天満宮を合祀した為、矢喰天神社と改称した。

(岡山市北区高塚108)

④血吸川  
吉備津彦命が放った矢が温羅の目に刺さり、そこから吹き出した血で真っ赤に染まったとされる血吸川。(総社市東阿曾)



### ③矢喰岩

矢喰天神社の境内にある巨岩群で、吉備津彦命が放った矢が変化したとされる。県郷土記念物に指定されている。

## 桃太郎伝説

第十一代垂仁天皇のころ、吉備の国に異国の王子が舞い降りた。名を温羅といい、吉備冠者とも呼ばれた。身長約四メートル、両目は虎か狼のようにらんらんと輝き、髪や髭はぼうぼう、性質は極めて凶悪であった。

温羅は備中国の西山(総社市奥坂)に居城を築き、西国から都へ送る貢物や婦女子をししばし略奪したり、気に入らぬ者は大きな鉄の釜(鬼の釜)で煮て食べたりしていたことから、人々は温羅を「鬼神」と呼び、その居城を「鬼ノ城」と呼んで恐れていた。

温羅の悪行にたまりかねた人々は和朝廷に温羅退治を申し出る。さつそく武将が送り込まれたが、温羅は神出鬼没にして変幻自在。武将はことごとく敗れ去った。

そこに白羽の矢が立ったのが、武勇に優れた五十狭芹彦命(吉備津彦命)であった。命は大軍を率いて吉備国に下り、吉備の中山に陣を張り、片岡山(倉敷市庄新町)に石櫛(櫛築神社)を築いて戦いに備えた。

命はいよいよ温羅と戦う事となったが、もとより変幻自在な鬼神のことであるから、戦うことと雷霆のごとく、その勢いは凄まじく、さすがの命も攻めあぐねた。

不思議な事に命の放った矢(7)①は、温羅が放った矢(岩)と空中でぶつかり合っただけで落ち、



①鬼ノ城(吉備平野を見下ろす西門)

なかなか勝負がつかない。  
矢が落ちた場所と言われているのが、吉備津神社と鬼ノ城の中間地点にある矢喰天神社(岡山市北区高塚)③。ここにはその時ぶつかり合っただけで落ちた矢が祀られている。  
そこで命は神力を発揮する。強い弓を使っただけで二本の矢を放った。これには温羅も不意をつかれ、一本は温羅の放った矢(岩)とぶつかり落下したが、もう一矢は命の狙い通り、温

羅の左目に命中。温羅の目から吹き出した血潮は血吸川④に流れ、下流の赤浜まで真っ赤に染めた。

命に追われた温羅は雉に姿を変えて山中に隠れた。しかし、機敏な命は鷹となつて追跡した。

そこで温羅は鯉に化けて血吸川に逃げ込んだ。これを逃すまいと、命は鵜となつて鯉に姿を変えた温羅にくらいつき、噛みあげた。その場所が鯉喰神社(倉敷市矢部)⑤である。

絶体絶命の温羅はついに命の軍門に下つて、最後におのれの「吉備冠者」の名を命に捧げたため、それ以後、命は吉備津彦命と改名した。

捕らえられた温羅は首をはねられ、首は首村(岡山市北区首部)にさらされた。ところが、その首は何年たつても大声を出してうなり続けたのである。

命は部下の犬飼武命に命じて犬にその首を食わせたが、ドクロとなつた首はうなるのを止めなかった。

そこで命は吉備津神社の御釜殿⑦の土中深く首を埋めさせたが、十三年間、うなり続けた。

ある夜のこと。命の夢枕に温羅が立って「わが妻、阿曾郷(総社市西阿曾)の祝の娘・阿曾媛に神饌を炊かしめよ。そうすればこれまでの悪業の償いとして、この釜をうならせて世の吉凶を告げよう。」と言った。

これが今に伝えられている吉備津神社御釜殿の鳴釜神事である。その後、吉備国の統治にあたった吉備津彦命は、晩年、吉備の中山の麓の